

釧路市キムウングルコタンチャシ跡について

西 幸 隆*

On the Kim un kur kotan casi kot in Kushiro city

Yukitaka NISHI*

1 はじめに

釧路市内には、現存するチャシ跡として国指定史跡のモシリヤ砦跡、鶴ヶ岱チャランケ砦跡がある。かつてはウライケチャシ跡などいくつかのチャシ跡が存在したが、現在では消滅してその姿を見ることはできない。

昭和10年、釧路市では釧路考古学研究会などの働きかけもあり国指定史跡候補地として上記2遺跡に加えウライケチャシ跡、キムウングルコタンチャシ跡、桂恋チャシ跡、春採台地堅穴群の測量調査を実施し、これらのうちモシリヤ砦跡、鶴ヶ岱チャランケ砦跡、春採台地堅穴群の三箇所を申請し昭和10年12月24日国の指定を受けている。

指定対象遺跡は、いずれも市有地であり買い上げなどの行為が不要であったため容易に選定されたものとみられ、残る私有地の三遺跡は、その後に消滅するという極めて残念な経過を辿ることになる。

これまで、史跡申請時に使用された二つのチャシ跡と春採台地堅穴群、及びウライケチャシ跡の測量図は保存されていたが、キムウングルコタンチャシ跡に加え桂恋チャシ跡の図は確認されなかった。昨年、筆者が釧路市立博物館内の物品庫を整理した際に偶然にもこの二つのチャシ跡の測量図を見つけ、チャシの詳しい状態を確認できる内容であることから、ここにキムウングルコタンチャシ跡の図を紹介し、あわせてチャシの存在理由についても言及しておきたい。

2 キムウングルコタンチャシ跡について

(1) 記録に残されたチャシ跡

幕末の松浦武四郎による戊午第十五巻東部久須利誌下によると、塘路から釧路へ至る項の中でチャシ付近にはキイコルコタンが存在したことが記されており、「本名キムンコルコタンと云り。山の僕（衆）の村と云り。是近年まで有し由也。此辺山の下に小川、其処は枝川に成て小島有るより号し也」とある（松浦1985）。ここではコタンの存在は示されたがチャシの存在については触れられていない。場所としては、「向ひの方右のかたアカンプト」とあり、右前方に旧阿寒川の川口がある記載からおおむねの位置を想定できるが、コタンそのものの位置については台地上なのか川に面した低地なのかこの記載からは読み取ることにはできない。

その後、大正15年に至り、清野謙次によるチャシ跡の発掘調査が行われている（清野1926）。チャシ跡の調査

※釧路市立博物館（Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido, 085-0822）

を目的としたものではなく堅穴住居跡が対象でこの地方の土器について調査することが目的であった（清野1969）。チャシに触れた項を抜粋すると以下のである。「ここには土垣をめぐらしたチャシがあるし、また数個の堅穴が存在して居った。午後4時からチャシに最も近い堅穴第1号を発掘し始めた。（略）チャシ内の一部及びチャシ土堀に使用した盛り土の一部分から多数遺物が出る所を発見し、ここを掘った所が多数の土器が出て来た。」という。これを「釧路チャシ発見遺物」として紹介しており、北筒Ⅳ式土器、幣舞式土器、矢柄研磨器などが図示されている。その一部を図2に示した。チャシに伴う遺物は示されていないが、晩期から続縄文期にかけての遺物が多数存在する遺跡であることを知ることができる。ここで言うチャシの土堀や盛り土に関しては平面図をもとに後述したい。

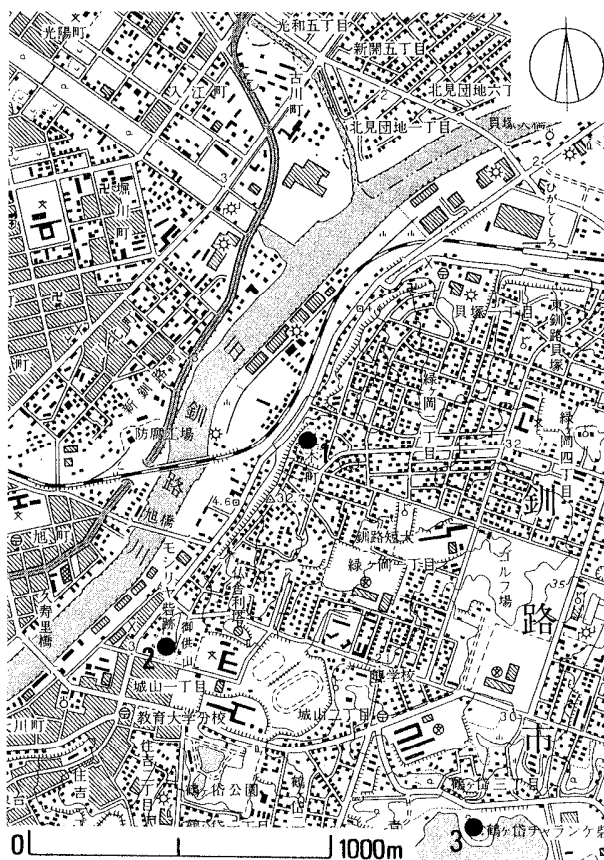


図1 キムウングルコタンチャシ跡位置図（1：キムウングルコタンチャシ跡、2：モシリヤ砦跡、3：鶴ヶ岱チャランケ砦跡）

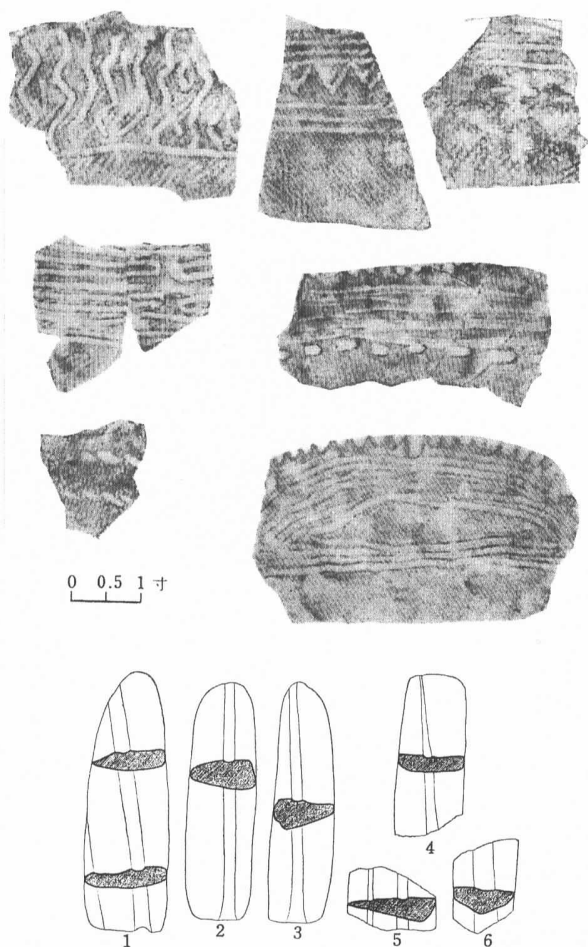


図2 チャシ跡出土遺物（清野1969）

次にこのチャシについては昭和8年の川合真平による堅穴分布図によりその位置を知ることができる（川合1933）。その一部を図3に紹介した。矢印で示したが堅穴住居跡の多数存在する中にチャシの印がある。おおまかな地形を知ることができる図であり、遺跡の北側に大きな沢が入っている様子を知ることができる。

昭和10年に発行された釧路考古学研究会による「釧路市の先住民族遺跡」改定版には、初めてキムウングルコタンチャシとして紹介されている（吉田1935）。その位置は「フレムサ台地の鉄道用地内、城山町チャシ（通称お供山）から北東一キロ余の丘陵上、自然地形を巧みに利用して土塁をめぐらし、土塁外部前方は崖、右左及後方には深さ約四尺の壕一重を掘り、土塁内部に約七間四方の館跡と見えるものを含む特色あるチャシ、附近一帯は無数の堅穴群である。」と述べられている。また、昭和9年6月札幌控訴院長、同検事長、釧路地方裁判所検事正及び釧路考古学研究会桑原会員により発掘されたことも記されているが、チャシそのものの遺物は示されていない。写真があり壕を確認できるが、チャシ内部の平坦面の様子や全体像までは確認できない（写真1）。位置的にはチャシの南東方向から北側の壕を見た姿であろうが、よく観察すると壕の窪んだ先に釧路川が写っており、位置からも当時の阿寒川の川口そのもので中島を望

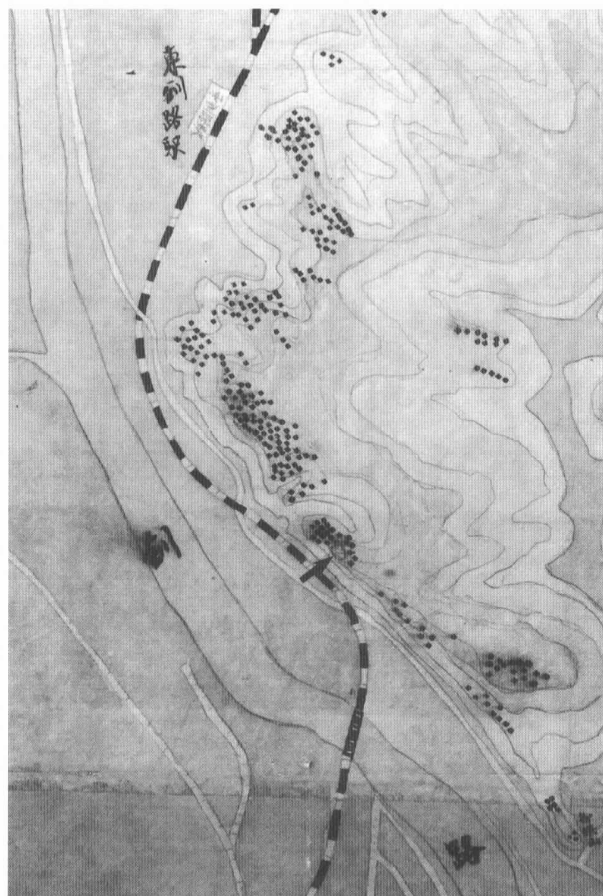


図3「釧路地方ノ堅穴」（川合真平）によるチャシ（→）位置図（原図に矢印加筆）

むことができる。チャシ跡の位置を知る上では貴重な写真であろう。

同じような写真が清野謙次によっても撮影されている（註1）。図示していないが、同じ方向から発掘の様子を撮影したもので、北西側に阿寒川の川口と中島を確認することができる。

佐藤直太郎は、昭和35年に至り「釧路市内における失われたる先住民族の遺跡の話」を連載した中で「キムウングルコタン・チャシコツ」として紹介している（佐藤1968）。その中で昭和8年に踏査した際には「西方の崖



写真1 キムウングルコタンチャシ跡の壕（吉田1935）

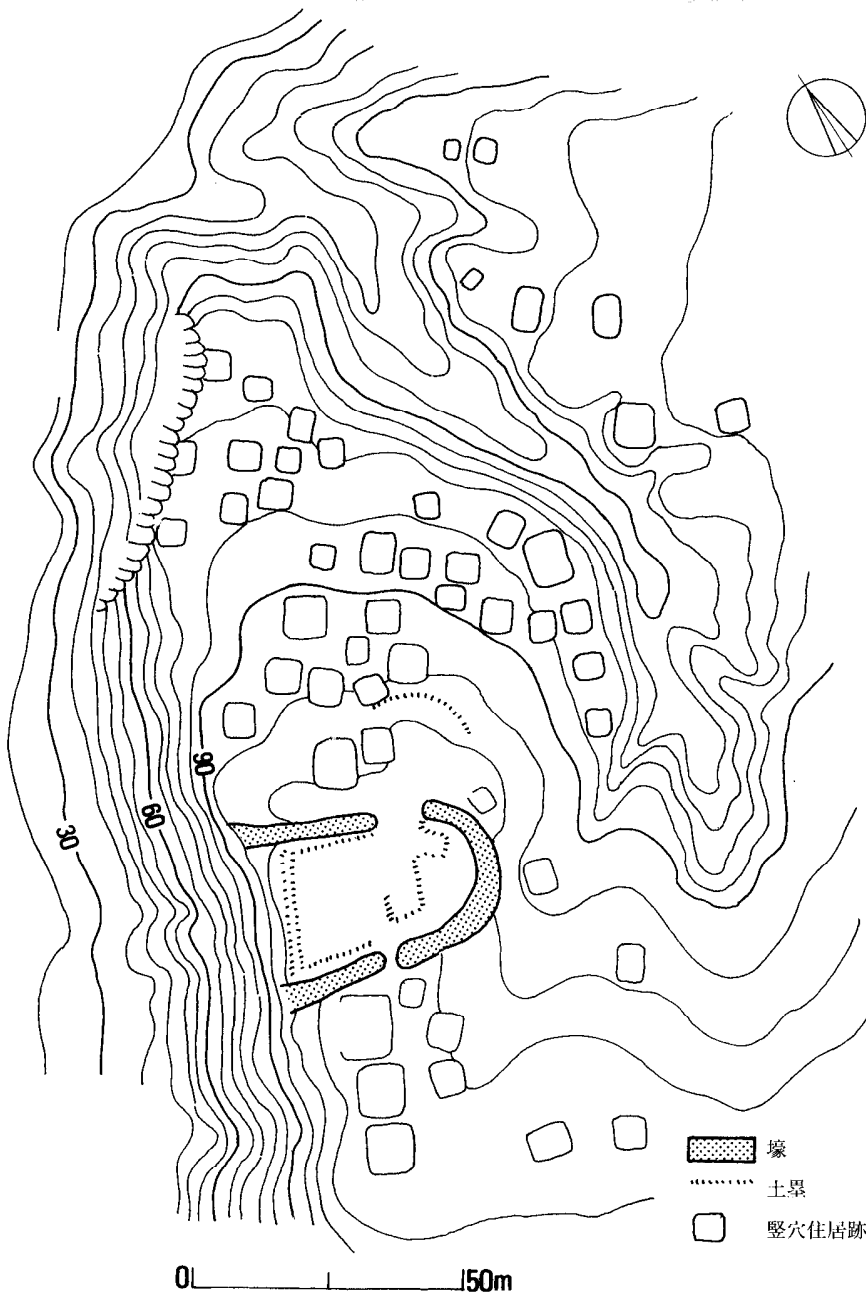


図4 キムウングルコタンチャシ跡平面図（標高単位尺）原図に一部筆者加筆

縁は高さ三尺の土塁が10間の長さで築かれ、南・北も同様の土塁で囲まれていたが、ただ東方は土塁がなく、自然の平地で一部切れて入口になっていた。そしてその外部は深さ五尺、幅一間半の空壕がめぐらされていた。その長さは四二間に及んでいた。土塁の内部は竪穴のように掘られて底部は平坦になっていた。」という。ここではキムウングルコタンについても触れており「キムウングルコタンの名称は、このチャシコツの下、少し川上にあたる崖下の辺をいったので・・」とあり、釧路川に面した左岸の沖積低地にコタンのあったことを述べている。また、「昔はこのチャシコツのすぐ下を釧路川が流れ、それに阿寒川が西から注いでいて、鮭・鱒の漁には真によい位置を占めていた。また東部の狭い谷間によい

飲料水が湧出している。このチャシコツを中心にして、無慮二百数十ヶの竪穴群落を形成していた。近年学界に緑ヶ岡式土器として、その特色ある土器が認められているのはこのあたりから出土したものである。」と述べられている。さらに、チャシに見られた土塁の存在に関して聞き取りを行っている。かつては、大きな竪穴の周囲に浅い空壕をめぐらしてあったそうで、チャシ内に家を建てるために土塁を設置したという。このことから、土塁そのものは明治に入ってから築かれたことが理解でき、昭和35年当時は土塁は壊され、壕も浅くなって畑に変わり、昔の面影がなくなったと述べられている。

佐藤直太郎の記載から、この場所が緑ヶ岡遺跡1遺跡（かつての緑ヶ岡遺跡）そのものであることを知ることができ、吉田仁麿、清野謙次による写真とも符合する。また清野謙次による発掘調査で得られた資料からも裏づけられる。後に澤四郎により、緑ヶ岡遺跡の破壊について述べた中で「墳墓ばかりでなく、その上部に残された無数の擦文時代の竪穴住居址、アイヌ時代の墓、チャシ（キムウングルコタンチャシ）もその巻添えにされた」とあり（澤1969）、筆者が参加した昭和38年の発掘調査時点ではチャシ跡や竪穴住居跡は削平されてその位置を確認することができなかった。しかし、この記載からも明らかなように緑ヶ岡1遺跡の中にチャシが存在したことを理解できる。

次に、上記の記録をもとに昭和10年に作成された測量図について、これまでの佐藤直太郎の聞き取りを含めた記録も参考に検証しておきたい。

(2) 測量図に見るチャシ跡

チャシ跡の測量図を図4に示した（註2）。地形的には南北方向に大きな沢が入っているが、これは昭和8年の川合真平の図とも符合する。測量図内の擦文文化期の竪穴住居跡は大小51軒を数える。標高を尺のまま示したが、台地のほぼ頂部、チャシ周辺で標高30mを超えている。地形からみてもチャシそのものは台地の最も高い位置が選定され、その中央部に位置していることが理解できる。

最初に述べなければならないのは、ひとつはチャシの土塁についてである。先に紹介した佐藤直太郎による聞

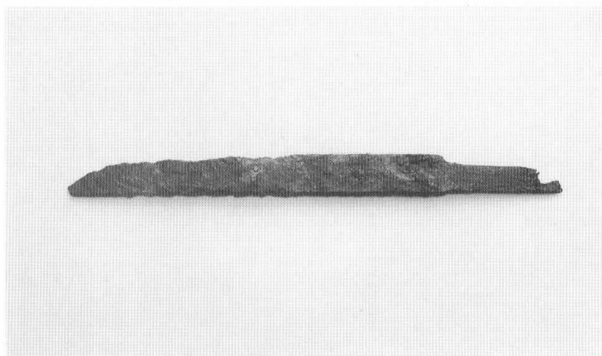


写真2 キムウクルコタンチャシ跡出土の短刀

き取りで土塁は明治に入ってから築かれたものとされ、むしろ壕内側のチャシ頂部平坦面がおおむね破壊されてしまった形となっている。佐藤による「土塁の内部は堅穴のように掘られて底部は平坦になっていた」とする様子からもこの時点ではチャシ本体の多くの部分は失われていると解釈されよう。しかし、明治30年代という佐藤直太郎の聞き取りでは、大きな堅穴のまわりに壕をめぐらせてあったとされ、付近の状況からみても内部に堅穴住居跡が存在していた可能性がある。

もう一つは壕についてである。佐藤直太郎によると、「東方は土塁がなく自然の平地で一部切れて入口になっていた」とされ、東側とされる北東方向の陸橋が本来存在していたかどうか定かでない。その長さからみて、むしろ南側の壕の切れた部分が陸橋の可能性が高いが、二次的に手が加えられていることや記録にも残されていないことから判然としない。吉田仁麿も「深さ約四尺の壕一重を掘り」とあり陸橋の存在には触れていない。ここでは南側で陸橋の可能性が高いことを述べるに留めておきたい。

図示された壕は、崖側でやや広がるが記録では深さ1.2m～1.5mほどある。原図の縮尺が1,200分の1のため、詳しい壕の幅等の数字は計測できない。

いずれにしても、ここで言えることはチャシ跡は地形的に最も高い位置に釧路川に面して築かれていたこと、東西方向を長軸とする壕をもち西側で直線的に延びて開口していること、内部に堅穴住居が存在していたこと、土塁は明治期に築かれたこと、陸橋についての記録がないこと、などを列記することができる。

チャシ跡出土遺物としては、釧路市立博物館に鉄製品が1点保管され展示されている。写真2に示した短刀で現存する長さが32cmある。具体的な出土状況など詳細は不明である。本資料は、チャシ跡出土の残された唯一の資料であろう。

3 チャシ跡の立地について

釧路川左岸の台地におけるチャシ跡は、河口付近で海に面して知人岬のチャシ跡、会所裏のトイチャシ跡、ヌサマイチャシ跡が存在したがすでに消滅している。河口をやや離れてモシリヤチャシ跡があり、次いでキムウクルコタンチャシ跡が位置している。

キムウクルコタンチャシ跡は臨川性、面崖式のチャシで、その立地については、釧路川よりもむしろ当時の阿寒川の川口を意識した資源監視の場として築かれた可能性を指摘できる。すでに阿寒川は川口を変え現在は釧路川へは流れ出ていないが、当時の様子を知ることのできる資料として大正11年に作成された釧路区詳図があり関係する部分を図5に示した。図中央東側の釧路川左岸に本チャシが位置する（○印）。この対岸西側に相対して旧阿寒川の川口がある。川口には中島が位置し漁撈活動には格好の条件を備えている。

かつて松浦武四郎がこの川口を通過する際に「アカンブト川幅二十間も有。（中略）其川鮭・鱒・鯰・鰻・チライ多し。」と記し、釧路川についても「此川すじも、是より上廿丁計は秋の末の頃にシュサモ多く入りて、飯料十分の川すじなり」とあり、阿寒川川口付近や釧路川自体も豊富な漁業資源のあることを知ることができる。

図5からはやや右下にモシリヤチャシ跡が示されている。この時にも釧路川の中島が位置しており、川の中島の対岸というモシリヤの地名の由来がよくわかる。

また、キムウクルコタンの位置は、佐藤直太郎によりチャシのある台地ではなく川との間の沖積低地であったと述べられており、湿原の低地を覆っていた縄文の海



図5 大正11年の釧路区詳図(○キムウクルコタンチャシ跡)

の海退後に人々は低地での集落を営むようになったことを教えてくれる。このことについては後述するが、図5からも川沿いの土地利用が北へ向けて進む様子を見ることができる。

いずれにせよ、旧阿寒川の川口に面してキムウクルコタンチャシ跡が存在したことは、まさしく資源監視の機能を有していたことにほかならない。このことがチャシの立地条件に大きく関わっていたのであろう。

4 釧路川左岸における土地利用の変遷

すでに述べてきたが、チャシの構築に至るまでの土地利用がどのように行なわれてきたのかについて検討しておきたい。このことは、釧路川左岸の台地一帯の遺跡にも共通する問題であり、土地利用がこれまで考えられてきた台地主体に検討されてきた集落の立地から「低地と台地の関係」という視点で見ようとするものである。低地の土地利用がこの地域においても川沿いを中心に展開されたとみられ、縄文晩期からその傾向が存在したと考えられる。かつて、釧路川左岸の台地における遺跡の重複性についての図表を作成したことがある（澤・西1975）。この時の対象は、モシリヤ砦跡から東釧路貝塚付近までの台地であったが、縄文晩期の墓跡がある貝塚町1丁目遺跡、緑ヶ岡1遺跡などすべての遺跡で続縄文初頭以降終末にかけての時期が欠落していた。また、集落跡に関しては晩期では貝塚町1丁目遺跡で住居跡がわずかに確認された程度であった。こうした傾向も土地利用の変遷を検討する上で重要な資料となる。

さて、今回の対象のひとつは、キムウクルコタンチャシ跡がある緑ヶ岡1遺跡である。周知のとおり縄文早期、中期から晩期、続縄文期、擦文期を経てアイヌ期にかけての遺跡である。昭和34年から39年にかけて河野広道、澤四郎による発掘調査が実施され数多くの墓跡が検出されている（澤1969・1987、宇田川・澤1984）。この大墳墓群の存在理由については明確にされていないが、集落跡は墓跡と同一台地ではなく、釧路川に面した沖積低地に存在した可能性を指摘できるのである。晩期そのものではないが、続縄文前半と見られる遺物が低地から採集されており、この時期の遺物が台地には認められていないことがひとつの根拠となる。

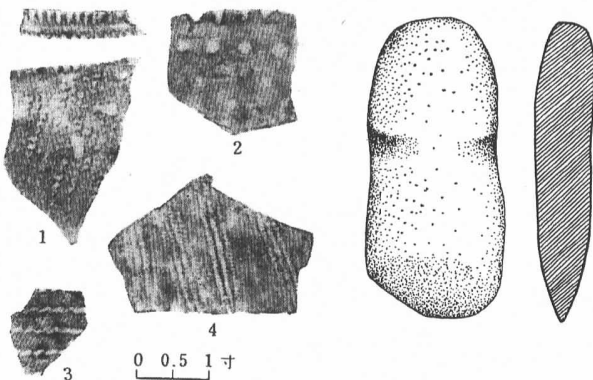


図6 釧路別保原野出土遺物（清野1969）

遺物は、先に紹介した大正15年の清野謙次による調査で最初に得られている。この時、東釧路貝塚の調査を終え、帰路市内へ向う途中降雨に遭遇し、雨宿りのため立ち寄った民家に釧路川に面した低地の畑地で採集したという遺物を譲り受けている。この時、畑地を踏査されさらに遺物を採集された。後に譲り受けた遺物とともに紹介しており（清野1969）、図6に遺物を示したが採集地は釧路川に沿った畑地とされ、詳しくは「釧路市釧路村別保原野南29線東20番地」という。「すぐ上の丘上に登った」ところチャシを確認し釧路チャシと名づけており、これがキムウクルコタンチャシであるという。このことから、キムウクルコタンチャシの下の低地面の釧路川に面した位置に遺跡が存在することを理解できる（註3）。かつて国により実施された原野区画によりモシリヤチャシ北側までが釧路村別保原野東29線として線引きがされていた。図4のキムウクルコタンチャシ跡（○印）のすぐ南の実線が28線であり、位置を示さなかったが鉄道線路を越え道路と釧路川の間に遺跡が存在することになる。この場合、遺跡は28線より北側に位置することから、清野謙次による番地記載が27線の可能性が極めて高い。出土遺物は続縄文前半とみられ、この時期の遺跡が川に面して細長く存在した可能性がある。釧路川の浚渫工事により川底から続縄文期の土器が発見された経過もあり、海退後は低地に集落が存在していたとみることができる。確認されていないが、縄文晩期にもこの低地に集落が存在していたと考えられ、これまで注意されていなかった川に面した沖積低地の土地利用を検討する上でも極めて貴重な資料であるといえよう。

釧路川左岸の台地に墓跡を残している例はほかにも存在する。例えば、ヌサマイチャシ跡のあった幣舞遺跡もそうである。ここでも数多くの墓跡が調査され縄文晩期から続縄文期、アイヌ期の墓が103基まとまって検出されている（石川1999）。この遺跡も緑ヶ岡1遺跡と同様に住居跡は確認されていない。ただ貝塚や骨塚は検出されている。

墓跡を残した人々は、やはり釧路川に面した低地に集落を営んだと考えることも可能である。

もうひとつ似たような例がある。釧路町テンネル1遺跡の釧路川に面した低位の段丘面に数多くの墓跡が存在するとみられる場所がある。条件はキムウクルコタンチャシ跡と類似しており、西側の正面で雪裡川の川口に面している。近くにはテンネル北チャシ跡、テンネル南チャシ跡のふたつのチャシ跡が存在する。

墓跡のある台地からは縄文晩期から続縄文期の遺物が多数採集されている。付近の低地にも遺跡の存在が確認されており、性格的にはキムウクルコタンチャシ跡のある低地と同じとみることができる。

以上のように、釧路川左岸の3遺跡についてみてきたが、これまで注意されなかった沖積低地での土地利用が少なくとも縄文晩期から存在したと考えることが可能と

なった。加えて、これらの遺跡の残された時期が縄文晩期から続縄文、擦文文化期、そしてアイヌ文化期にチャシ跡が存在する点で共通していることがあげられる。なおかつ、台地と低地の墓跡、住居跡についての土地利用の面で極端な傾向が認められた。

釧路川下流域においては、釧路川河口付近、阿寒川の川口付近、雪裡川の川口付近に大きな集落跡の存在したことを確認できた。このことは、サケマスなどの漁撈活動を行うためのある種拠点的な集落が川に面した低地に存在していたと考えることができる。低地の住居空間としての土地利用は縄文晩期から続縄文期まで続けられ、擦文期には東側の台地へ移動している。さらにアイヌ期に至り住居空間は再び低地に移り、チャシの機能だけが台地に残されたと判断される。

仮に各遺跡に住んだ人々を集団として位置づけた場合、釧路川河口のヌサマイ集団、阿寒川の川口のキムウンクルコタン集団、雪裡川の川口のテンネル集団に分けることができ、それぞれが長い間にわたり継続性をもった集落を沖積低地で営み、神聖な墓跡は太陽が昇る東側の台地に求めたものと考えることができる。従って、時には集落が営まれ、墓跡だけが残されたり、チャシの機能に限られたりという土地利用があり、それぞれ同一の変遷の仕方を辿ったのであろう。キムウンクルコタンチャシ跡もそうした時代の流れの中で土地利用がなされたものと位置づけることができる。

5 おわりに

以上、キムウンクルコタンチャシ跡を紹介し、あわせて釧路川下流域における土地利用の変遷についても触れてきた。

チャシ跡の存在を考える場合、それまでの土地利用のあり方が重要な意味をもっており、チャシ構築までに同じような土地利用が釧路川下流域で行なわれていたことを述べてきた。各河川の川口に拠点的に漁撈活動を主体とした集団が占拠し、なおかつ継続性をもった集落機能が存在していたとみることができる。同時に、東側台地に墓跡をもつという共通した土地利用が存在していたことも大きな意味を内包しており、神聖な場としての位置づけを想定できそうである。

ひとつチャシ跡に限らず、同じような視点で釧路湿原周縁の台地の遺跡を検証し、再度具体的に土地利用の変

遷について述べる機会をもちたい。

最後に、本稿を草するにあたり北海道立アイヌ民族文化研究センター古原敏弘氏、釧路市立博物館戸田恭司氏に御教示及び資料の提供をいただいた。厚くお礼申しあげる次第である。

(註1) 京都大学所蔵資料の中から慶応義塾大学教授高山 博氏のご好意により拝見させていただいた。

(註2) 原図では堅穴住居が点線であったが実線表示したほか一部加筆した。

(註3) (註1)の資料の中に遺物を採集した地点が写真で示されており、すぐ後方に釧路川が見える。

引用参考文献

- 石川 朗 (1999)「釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ」釧路市埋蔵文化財調査センター
- 宇田川洋・澤四郎 (1984)「釧路緑ヶ岡遺跡の墓壙」河野広道博士没後二十年記念論文集 北海道出版企画センター
- 川合真平 (1933)「釧路地方ノ堅穴」図
- 清野謙次 (1926.1927)「北海道北東部人類學的探究紀行」民族第2巻第6号、第3巻第2号
- 清野謙次 (1969)「釧路市附近堅穴及びチャシ跡の発掘」日本貝塚の研究 岩波書店
- 佐藤直太郎 (1968)「釧路市内における失われたる先住民族の遺跡の話」続佐藤直太郎郷土研究論文集 釧路叢書第九巻
- 澤四郎 (1969)「釧路川流域の先史時代」釧路川—その自然と生活— 釧路叢書第十一巻
- 澤四郎・西幸隆 (1975)「釧路湿原周縁の遺跡分布」釧路湿原総合調査報告書 釧路市立博物館
- 澤四郎・西幸隆 (1977)「釧路湿原周縁の遺跡分布の変遷」釧路湿原 釧路叢書第十八巻 釧路湿原総合調査団編
- 松浦武四郎著・高倉新一郎校訂・秋葉実解説 (1985)「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌上」 北海道出版企画センター
- 吉田仁麿 (1935)「釧路市の先住民族遺跡・改訂版」釧路考古学研究会